

ともに 歩もう 石巻だより

女川から出発

あの日は小学6年生。
中学校で活動を始めた。
「千年後の命を守るために」
その担い手たちの今を追う。

山下脩さん「海上保安学校学生」

「海の中、捜してあげたい」

京都府舞鶴市長浜
の日本海に面した海上
保安学校の寮で、今春

の入学生約270人は厳しい規律の共同生活を送る。平日は朝6時25分、この館内放送から始まる。

「総員起こし5分前」。2度の放送の間に起き出し、ベッドを整え、着替え、5分後、「総員起こし起床整列5分前」の放送で外へ。整列し、人数を報告し、体操する。その後に掃除。それから朝食。

食堂では当直学生の「姿勢を直し食事始め」の掛け声で食べ始め、10分後、「姿勢を直し食事開け」の掛け声で終える。

朝食後。次の放送「国旗庁旗あげかた5分前」が入る。「1分前」

で廊下に整列。放送は「10秒前」「時間」と続き、音楽が流れる。国歌と校歌を斉唱。再び整列、人数を報告、行進し、授業へ。体力テストもある。懸垂をする。短艇も漕いだ。



ねて安堵。受験を決意した小学生の頃からあこがれていた。震災後は、海中捜索のテレビニュースを見て「自分も潜りたいな」と思った」と話す。

昨年の秋号をお届けした後、長くご無沙汰申し上げました。ゆっくりと、でも、継続を心に誓い、ふたたび朝日新聞社員がつづります。大切な記憶を、確かな記録に。

なぜそう思ったの？ 脩さんの家族はみな無事だ。ゆっくり語り出す。

「お姉ちゃんと同級生でも、見つからない人もいるし。この海の中にいると考えると、手がかりでも捜してあげたいと思うし……」

3歳上の姉の後ろを歩いて歩いていた幼い頃、姉の同級生の少年がいつも優しく相手をしてくれた。何をしたかは覚えてない。彼の顔もおぼろげだが、遊んでもらったという記憶は残っている。

「自分の物も出てきてほしいな」

問わず語りに、中学生の頃の思いを語り続ける。「……あと自分が家に置いていた物も探したいな、と。家の下から出てこなかったということは絶対、海のどこかにあるということなので」。家は女川町中心部の清水町にあった。母が育った家に、父母と姉と4人で暮らしていた。

あの日は女川第二小学校6年生。4階の教室にいた。机の下へ。全体重で押さえても机は動く。後方の棚から落ちた画鋲が床に散らばった。収まったと思っただらまた揺れ出し、ゴオオと地鳴りが響く。校庭へ出た。これが、来ると言われて、

明日の風

あの日の音が耳に残る人もいるだろう。あの日の光景が目には焼き付いている人もいるだろう。それが

すべて昔話になる日。再び震える大地を蹴り、人々は山へ走るだろうか▼この夏、石巻市の日和山に「語り部」の2人を訪ねた。佐藤美香さんと西城江津子さん。2人は、道案内しながら、あの日の悲劇を語り継ぐ。二度と繰り返さぬため、伝え続ける▼日和山は0.7キロ先に海を望み、水平線と平行になだらかな稜線を描く。山頂に神社と公園を、山肌に関静な住宅街を抱える。山すそまで達した津波はそこには届かなかった。2人とふもとを歩く。新築の家が並び始める。2人は真新しい平らな道で「娘たちはここにいました」▼6年前は坂道だった。佐藤さんの長女と西城さんの次女の最後の地だ。ともに当時6歳。山腹にある幼稚園に通っていた。地震の後、送迎バスに乗せられた。バスは防災無線放送が響き渡るなか、山を下りて海辺を巡り、園へ戻る途中の坂で流さへ

いた宮城県沖地震か。震源地を調べると担任の携帯をのぞくと、福島県沖のよう。同級生と話す。また地鳴り、と思つたら、男性の叫び声。「津波だ。上さ逃げろ」。学校は山の中腹。さらに上にある運動公園へ。

公園の手前、眼下に清水町。視界に、土ぼこりをあげて流れてくる茶

色の水。のちに、あれが津波だったんだと認識した。

女川が流れる溪谷に清水町はある。山が遮り、約1・2キロ先の海は見えない。

家にいた母と姉は外へ。防災無線が大津波警報を告げる。近所のお年寄り慌てず母へ「片付けらいいん」ところが、姉は「脩に会いに行こう。不安がつている」。

「ここにしよう」と返しても、「絶対に不安がつている」。4度繰り返す姉に母は根負けし、「もうしつこい」と怒りながら車を出す。バキバキと音が響く。土ぼこりが前方から向かってくる。間一髪、山へ。

脩さんは2日後、迎えに来た父と家へ向かった。数十メートル先で2階部分だけが傾いて残っていた。砕けた階段の下によその家具が積み重なる。かきわけても何も出てこない。おもちゃのミニカーも電車も。古銭を入れた財布も。お気に入りの枕も。毎日通って探した。風呂場のタイルのかけらを見つけた。表札も見つけた。が、自分の大切な物は出てこなかった。

——探したい気持ちは、今は変わった？
そう問うと、即答した。「いや、今も探したいなというのはある。確かに今と

なつたら貝とかはりついて全然わかんないと思うんですけど。でも、出てきてほしいな」

「うち寄ってもらえる？」

お茶だすよ」



脩さんは女川第一中学校に入学した。

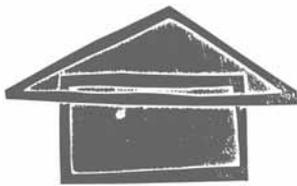
1年生の最初の社会科の授業で教諭が投げかけた「ふるさとのために何ができ

るか考えてみよう」の一言が、生徒たちを突き動かし、1年生の終わりには津波対策を練り上げていた。2年生になり、その実現をめざす実行委員会が発足。脩さんも加わり、サッカーの部活の合間に駆けつけた。

対策の一つは記録を残すこと。それには震災の教訓を刻んだ石碑を町内21カ所の浜の津波到達点へ建てる。21基の建立費1千万円は募金で集めた。

3年生になる春。脩さんも募金箱を手に立つ。実際はしんどい時期だった。大切な物がなぜなくなつたのか。答えは出ないのに考えるようになっていた。実行委も「思い出さなくちゃいけないからいやなんだけど。やらないと、なんか、やなの。今やつといたほうが楽になる」。うつむいたまま消え入りそうな声で取材に応じてくれた。

震災のニュースも食い入るように見つめていた。「見ないとなんにも始まらない気がするから。いやだなと思ひながら見る」



中学時代は、工事車両の往来が激しいため、バス通学だった。同じ実行委の同級生、渡邊 澁(ぬ)大さんと並んで座る。学校のある山を下りると、澁大さんが窓の外を指さす。「今日泊まっていたよ。屋根ないけど」

一緒に澁大さんの家の跡地を見つめた。

高校進学後も実行委は「女川1000年後のいのちを守る会」と改称して活動する。石碑が1基立つたたびその浜の人々を招いて除幕式を開く。会では脩さんだけがすべての式に出席。毎回、司会役を務める。

京都へ発つ前、脩さんは澁大さんの車で女川町内を巡った。帰りがけに頼んだ。

「うち寄ってもらえる？ お茶だすよ」

澁大さんは即、清水町へ。更地のまま残る脩さんの家の跡地に車を止めた。外へ。風が冷たい。車に戻り、携帯を手にしばらく過ごし、「帰ろうか」。

跡地は、町の求めに応じ、手放した。いざれ町はそこに公園を造る。

守る会は、体験を綴り、中学生むけに防災を説く「女川のいのちの教科書」も作った。全63頁。高校卒業と同時に完成した。

会の取材を兼ねて海上保安学校の入学式にテレビ局が来た。寮で同室の学生たちも「教科書を見せて」。1頁1頁丹念に目を通し「すごいな」「大変だったですよ」。

今、守る会はLINEのグループ通話で月一度の会議を催す。休憩時間の10分間だけ参加するその活動は脩さんにとって「癒やしです」。声が弾む。満面の笑み。

れた。園にいれば守れた命だった▼深夜、ふもとは炎に包まれた。3日後、まだ所々くすぶる中、坂道で、焼け焦げたバスを、愛娘を、自らの手で捜し出した。「近くに娘たちのことを伝える碑を置きたい。ここより上へ逃げなさい」と目印にもなると思つんです」▼山すその旧門脇小学校の校舎にも行く。浸水した1階も、天井が焼け落ちた最上階の3階も、6年前のまま。今後、校舎中央部分を3階まで残し、両端は撤去する。一部保存の方針に対し、2人の母は全体保存を願う▼同小は、娘たちを乗せたバスが寄った場所だ。そこから歩いて避難することもできなかった。が、バスは娘たちを乗せたまま渋滞の車列へ向かった。「当時の悲惨さを物語るものは校舎の他に残っていない。景色が変われば記憶も塗り替えられていく」と2人は憂える▼「私たちが語れる間はいい。でも、いずれ語れない日が来ます。校舎をどう保存するか、震災を経験していない次世代に決めさせたい。壊すのはいつでも出来るのですから」

雄勝巡礼

第2章

石巻市雄勝町の港そばにあった
雄勝病院の家族の話の続けよう。

[第4回]

育児に全力投球、朝から怒る母

雄勝は、海の町であり、山の町でもある。海辺にあった3階建ての雄勝病院も、山を背負うように立っていた。

そこで働いていた主任栄養士、佐々木弘江さん。厨房の仲間にはいつも笑顔。机を並べていた若手栄養士は語る。

「まねできません。弘江さんは私にとつて神様です」

その話には、弘江さんの長女、春香さんは「えーっ」と声を上げ、笑った。

雄勝港から2キロ近く内陸の味噌作りに、弘江さん家族が暮らす2階建ての家があった。

10年前。春香さんが小学5年生の時、母は弟を出産して1年間の育児休暇を取っていた。

学校から帰れば玄関でカギを取り出す生活が変わった。家に母がいて、「お帰りー」と声がかかる。新鮮だった。

しかし、5年生はちょうど反抗期。朝もランドセルを背にむつり黙って玄関へ。

すかさず母の大声が飛ぶ。「いつてきます」をなんで言

わないのー」

「朝からすんごい怒るんですよ」。春香さんは思い出して笑う。

前年に、2歳下の妹と茶の間に呼び出され、両親から「赤ちゃんができただよ」「あんだだぢ、欲しいって言ってたでしょ」と告げられた時は複雑だった。学校でそういう勉強をした

ばかり。病院でもらったエコー動画をテレビで披露し、無邪気に喜んでいる両親のそばで、小学生の姉は心の中で「うそでしょ」とつぶやいていた。

男の子が生まれた。野球好きの父がつけた名前は「大輔」。

妹の花菜さんと交互に抱き上げて、口にした。

「意外と軽い」

大輔君の黒髪は垂直に伸び出す。バツと立った髪に、ずつとそうなのかなと気をもんだ。一度、刈ったら、落ち着いた。

みんな可愛かった。

花菜さんは率先しておむつを替え、お風呂に入れる。予防接種にも付き添った。

「大ちゃん」と呼び、母はほおを寄せる。寝る時は一緒。朝起こす時も抱き上げて食卓へ連れてくる。4歳のあの日の朝も。

今は子育てを一手に引き受ける父に、小学生になった大輔君がぼやいたことがある。「ママには怒られたことないのに」

姉たちは違う。新米の母は全力投球。小学生の姉妹がけんかをやめない時は玄関マットの上で正座を命じた。

もっと小さい頃。「外に出なさい」と姉をぼんと玄関の外へ。ガチャリと扉にカギ。夏の夜だ。春香さんは素足のまま。

両親に家が並ぶとはいえず、家並みの背後に山がそびえ、暗闇が迫り、何かの鳴き声が響く。

あーん。ごめんなさい。すぐにおとなしくなる。姉によると

「花菜とけんかして、うちが確実に悪かった時」のことだ。

2歳の年齢差は微妙だ。仲良く遊ぶ時もある。お菓子やおもちゃをめぐってもめる時もある。母は小学生の姉妹を公民館のピアノ教室へ通わせた。そこでも始まるけんかにピアノの先生も「やめなさい」と一喝。

姉妹でよく遊んだのは、シルバニアファミリー。

もう要らないなと思いつつ

家族のための料理、手を抜かず

春香さんと花菜さん姉妹は雄勝港そばの保育所に通った。姉は最初泣いたが、妹は姉がいるので喜び勇んで保育所へ。

迎えに来るのは、近所に暮らす父方の祖父母。

一緒に帰る小路で、野イチゴの赤い実を見つけた。口の中へ。甘酸っぱさが広がった。

雄勝小学校へ入学。姉の学年は児童24人。2年

下の妹の学年は児童16人だった。夏休みも祖父母と過ごす。

朝は祖父と一緒に、歩いて約5分先の雄勝港へ。

それぞれ釣りざおを手に、岸壁に腰をおろす。

小エビを釣り糸の先に。あるいは、祖父が細かく刻んでくれたムール貝を糸の先にベツとつける。うごめく餌は「やば、やば、やば」と祖父に任せた。

大きなボラも来る。さおを壊されぬよう引き揚げるが、遅れて、食いつかれたことがある。

釣り上げに成功。巨大な釣果に姉妹は大歓声。だが、祖父は「食べないから」と足でベツと蹴って海へ。「なんで捨てんの」。

も、高いものを買ってもらった記憶から捨てられずにいた人形は、家と共に流された。

姉妹そろって抗議。

まき餌をすれば、小魚のチカが集まる。ワカサギと呼んでいた。パケツいっぱいの小魚を祖母が天ぶらにしてくれた。

春香さんは語る。「おばあさんはワカサギの頭を手でもぐんですよ。お母さんには衝撃的だったらしくて『あれはできない』って。お母さんは包丁で切っていましたね」

揚げたては最高だった。昼時。母は帰宅し、腎臓病を患う父のための昼食を手早く準備。姉妹も食事に連れ帰る。

その忙しさに母自身は即席麺をかきこんでいたのを父は覚えている。家族のための多忙さをいとわず「栄養士がカップヌードルなんてね」と笑っていた。

午後、姉妹はふたたび祖父の元へ。今度は近くの雄勝小のプールに行く。夏休み中は学年を問わずに開放されていた。

田んぼにも遊びに行く。カエルを探す。ニョロニョロと蛇が出てきて、逃げ出した。

コンピニ裏も探検する。奥へ進めば山の中。カピカピの蛇へ

女川町議会

福島を視察⑬

「除染完了」で避難指示解除

女川町議会は2014年7月、福島県の東京電力福島第一原発事故の被災地を視察した。視察団に应对した2人を私は再び訪ね、1人目の大熊町職員の話の前々回と前回に記した。2人目、当時の浪江町議会議長・小黒敬三氏(61)の話今回から3回に分けて記す。

浪江町は原発立地町ではなく隣接町だが、全域が放射能汚染に。全町避難となった。町面積の8割が今も「帰還困難区域」だ。1年間の被曝線量の合計(年間積算線量)は50ミリシーベルトを超え、5年経っても年間積算線量が20ミリシーベルトを下回らない恐れがある。

残る2割の地域は、年間積算線量が20ミリシーベルト以下になることが確実と確認された「避難指示解除準備区域」と、年間積算線量が20ミリシーベルト超の恐れがあった「居住制限区域」。両区域の避難指示が今年3月末、解除された。

2割とはいえ、その地域に11年3月11日、町人口約2万1千人のうちの8割が暮らしていた。津波被害も大きかった。182人が犠牲になった。長引く避難生活の中で命を落とす人はさらに増え、今年2月末までに400人が震災関連死の認定を受けた。

昨年9月の全町民へのアンケート結果では「すぐに」「いずれ」町へ戻りたいと答えた人は17.5%。ただし、回収率は53.6%。回答しないのは戻らないからと考えれば、戻りたい人は1割を切る。アンケートは世帯ごとに配られた。小黒氏は言う。「世帯主のほとんどは男性。新しい土地になじめない男は多く、夫婦で意見が分かれる。うちの親戚でも夫婦げんかが始まっている」

小黒氏自身は、町内の自宅を手放さずに福島市内で建売住宅も購入。「うちは『行ったり来たり』『帰る』『帰らない』という選択は大変だ。過去に縛られたり、未来に期待をかけすぎたりして、今の生活がおろそかになってはいけない」

そもそも国の説明に納得していない。避難指示解除基準の20ミリシーベルトは、「日常」の値ではなく、「緊急時」に身を守るための国際的な基準値だ。

「20ミリシーベルト未満で大丈夫だと言うなら、全国一律20ミリシーベルト未満で良いはずだが、国はそうは言わない」

だが山林も河川も手つかず

今年5月、私は小黒氏の車で福島県二本松市から避難指示解除後の浪江町へ向かった。途中の川俣町で道沿いに黒い山が続く。1個1立方メートルの黒袋、フレコンバッグを3段に積み上げた山だ。汚染された土などが詰められている。ゆくゆく原発立地町の大熊町と双葉町に設けられた「中間貯蔵施設」へ搬送される。

川俣町山木屋。小黒氏が車のコンソールボックスの上に置いた線量計は、毎時0.265マイクロシーベルトを示す。女川町仮設役場庁舎前の約5倍の高さだ。

黒い山の奥に杉林が続く。ハンドルを握る小黒氏が説明する。

「山林の除染はやっていない。『除染完了で避難指示解除』と言っても、環境省が予定した除染が終わっただけ。河川や用水路、堤、ダムも手つかずで、帰還困難区域もやっていない。里山除染はこれからサンプル的に行う」

小黒氏は、解除前の住民懇談会を振り返り、苦笑する。「『解除なら、山菜とったり魚とったりしていいのかい。山さ入っていいのかい』と尋ねたお年寄りがいた。わざと聞いたんだね」。環境省の答えは「いや、それは出来ない」。

浪江町の広報誌は昨年度の河川の放射能影響調査の結果を掲載。イワナから測定されたセシウム137の量が1キロあたり1万ベクレル以上の時もある。平均でも3千ベクレル弱。消費者庁が示す食品の魚の暫定規制値は500ベクレルだ。

浪江町津島に着く。立て看板が並ぶ。「町内全域 防犯カメラ作動中」「この先 帰還困難区域につき通行止め」。ヘルメットを目深にかぶり、マスクと手袋を着けた係員らが、通行証を確認する。

津島は中心街から約30キロ内陸。事故直後の全町避難先に選ばれた地だ。近隣で毎時約330マイクロシーベルトの記録が出るほどの高線量地帯であるとは知らされずに、子どもたちも含めて直後の3日間をそこで過ごした。

車は山里を進む。若緑の木立が続く。「この6年に育った柳です」と小黒氏。本来は水田が広がっていた地だ。柳の根が水を通さない層を突き通し、田んぼに水が張れなくなると話す。

車は解除地域に入った。人影のない街にも黒袋が積み上がっていた。

の抜け殻をよく見た。たまに出
来たても発見。即、退却だ。
夜はカブトムシ捕り。虫取り
網とカゴを持つ。父が付き添う。
友だちも誘う。小学校や近所の
アパートの外壁で捕まえる。
弟が生まれた後のこと。春香
さんは母の日に、友だちと連れ
立って小学校隣の雑貨店でエプ
ロンを買った。母はそれを使わ

ず、大事にしまっておいた。
姉妹の誕生日に母は「食べた
いの何」と必ず聞いた。揚げ物
は体によくはないからと却下。そ
れ以外は何でも作ってくれた。
ハンバーグを注文すれば、ワ
インで煮込んで作ってくれた。
オムライスもおいしかった。
平日夜、仕事を片付けに病院
へ戻る母は、残業中の若手栄養

士にもオムライス
を持参。
「でかっ。でか
いですね」と若
手栄養士は感心。
母にとって普通
サイズのそれは、
お皿からあふれ
んばかりに載っ
ていた。



職場で笑みを絶
やさない母が家で
不機嫌になるのは
姉妹のけんかにか
もう一つ、父が養
生せずに無理をす
る時だ。
その怒りは長引
く。しばらく口を
きいてもらえず、

寝室も別々になり、今日はご飯
を食べさせてもらえないのかなあ
と父も恐れるほど。大丈夫。料
理の手を抜くことはない。
1日350グラム以上の野菜
を食べるのが良いと聞き及んだ
父は一度、「おらいとこもちゃん
と摂ってるの」と尋ねた。
「ちゃんと摂ってるよ」
即答が返ってきた。